歌よみに與ふる書

正岡子規

青空文庫

歌よみに與ふる書

仰(おほせ)の如く近來和歌は一向に振ひ不申(まをさず)候。正直に申し候へば萬葉以來實朝以來一向に振ひ不申候。實朝といふ人は三十にも足らでいざ是からといふ處にてあへなき最期を遂げられ誠に殘念致し候。あの人をして今十年も活かして置いたならどんなに名歌を澤山殘したかも知れ不申候。兎に角に第一流の歌人と存候。強(あながち)ち人丸赤人の餘唾(よだ)を舐(ねぶ)るでも無く固(もと)より貫之定家の糟粕(さうはく)をしやぶるでも無く自己の本量屹然として山嶽と高きを爭ひ日月と光を競ふ處實に畏るべく尊むべく覺えず膝を屈するの思ひ有之候。古來凡庸の人と評し來りしは必ず誤なるべく北條氏を憚りて韜晦(たうくわい)せし人かさらずば大器晩成の人なりしかと覺え候。人の上に立つ人にて文學技藝に達したらん者は人間としては下等の地に居るが通例なれども實朝は全く例外の人に相違無之候。何故と申すに實朝の歌は只器用といふのでは無く力量あり見識あり威勢あり時流に染まず世間に媚びざる處例の物數奇連中や死に歌よみの公卿達と迚(とて)も同日には論じ難く人間として立派な見識のある人間ならでは實朝の歌の如き力ある歌は詠みいでられまじく候。眞淵は力を極めて實朝をほめた人なれども眞淵のほめ方はまだ足らぬやうに存候。眞淵は實朝の歌の妙味の半面を知りて他の半面を知らざりし故に可有之(これあるべく)候。

眞淵は歌に就きては近世の達見家にて萬葉崇拝のところ抔(など)當時に在りて實にえらいものに有之候へども生等の眼より見れば猶萬葉をも褒め足らぬ心地致候。眞淵が萬葉にも善き調あり惡き調ありといふことをいたく氣にして繰り返し申し候は世人が萬葉中の佶屈(きっくつ)なる歌を取りて「これだから萬葉はだめだ」などゝ攻撃するを恐れたるかと相見え申候。固より眞淵自身もそれらを善き歌とは思はざりし故に弱みもいで候ひけん。併しながら世人が佶屈と申す萬葉の歌や眞淵が惡き調と申す萬葉の歌の中には生の最も好む歌も有之と存ぜられ候。そを如何にといふに他の人は言ふ迄も無く眞淵の歌にも生が好む所の萬葉調といふ者は一向に見當不申候。（尤(もっと)も此邊の論は短歌に就きての論と御承知可被下候）眞淵の家集を見て眞淵は存外に萬葉の分らぬ人と呆れ申候。斯く申し候とて全く眞淵をけなす譯にては無之候。楫取魚彦(かとりなひこ)は萬葉を模したる歌を多く詠みいでたれど猶これと思ふ者は極めて少く候。左程に古調は擬し難きにやと疑ひ居り候處近來生等の相知れる人の中に歌よみにはあらで却て古調を巧に模する人少からぬことを知り申候。是に由りて觀れば昔の歌よみの歌は今の歌よみならぬ人の歌よりも遙に劣り候やらんと心細く相成申候。さて今の歌よみの歌は昔の歌よみの歌よりも更に劣り候はんには如何申すべき。

長歌のみは稍(やや)短歌と異なり申候。古今集の長歌などは箸にも棒にもかゝらず候へども箇樣(かやう)な長歌は古今集時代にも後世にも餘り流行(はや)らざりしこそもつけの幸と存ぜられ候なれ。されば後世にても長歌を詠む者には直に萬葉を師とする者多く從つて可なりの作を見受け申候。今日と

ても長歌を好んで作る者は短歌に比すれば多少手際善く出來申候。（御歌會派の氣まぐれに作る長歌などは端唄にも劣り申候）併し或る人は難じて長歌が萬葉の模型を離るゝ能はざるを笑ひ申候。それも尤には候へども歌よみにそんなむつかしい事を注文致し候はゞ古今以後殆ど新しい歌が無いと申さねば相成間敷候。猶ほいろ〳〵申し殘したる事は後鴻に讓り申候。不具。

〔日本　明治31・2・12〕

再び歌よみに與ふる書

貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候。其貫之や古今集を崇拝するは誠に氣の知れぬことなどと申すものゝ實は斯く申す生も數年前迄は古今集崇拝の一人にて候ひしかば今日世人が古今集を崇拝する氣味合は能く存申候。崇拝して居る間は誠に歌といふものは優美にて古今集は殊に其粋を抜きたる者とのみ存候ひしも三年の戀一朝にさめて見ればあんな意氣地の無い女に今迄ばかされて居つた事かとくやしくも腹立たしく相成候。先づ古今集といふ書を取りて第一枚を開くと直に「去年（こぞ）とやいはん今年とやいはん」といふ歌が出て來る實に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。日本人と外國人との合の子を日本人とや申さん外國人とや申さんとしやれたると同じ事にてしやれにもならぬつまらぬ歌に候。此外の歌とても大同小異にて佗洒落か理窟ッぽい者のみに有之候。それでも強ひて古今集をほめて言はゞつまらぬ歌ながら萬葉以外に一風を成したる處は取餌にて如何なる者にても始めての者は珍らしく覺え申候。只之を眞似るをのみ藝とする後世の奴こそ氣の知れぬ奴には候なれ。それも十年か二十年の事なら兎も角も二百年たつても三百年たつても其糟粕を嘗（な）めて居る不見識には驚き入候。何代集の彼ン代集のと申しても皆古今の糟粕の糟粕の糟粕の糟粕ばかりに御座候。

貫之とても同じ事に候。歌らしき歌は一首も相見え不申候。嘗て或る人に斯く申し候處其人が「川風寒く千鳥鳴くなり」の歌は如何にやと申され閉口致候。此歌ばかりは趣味ある面白き歌に候。併し外にはこれ位のもの一首もあるまじく候。「空に知られぬ雪」とは佗洒落にて候。「人はいざ心もしらず」とは淺はかなる言ひざまと存候。但貫之は始めて箇様な事を申候者にて古人の糟粕にては無之候。詩にて申候へば古今集時代は宋時代にもたぐへ申すべく俗氣紛々と致し居候處は迚も唐詩とくらぶべくも無之候得共さりとて其を宋の特色として見れば全體の上より變化あるも面白く宋はそれにてよろしく候ひなん。それを本尊にして人の短所を眞似る寛政以後の詩人は善き笑ひ者に御座候。

古今集以後にては新古今稍すぐれたりと相見え候。古今よりも善き歌を見かけ申候。併し其善き歌と申すも指折りて數へる程の事に有之候。定家といふ人は上手か下手か譯の分らぬ人にて新古今の撰定を見れば少しは譯の分つて居るのかと思へば自分の歌にはろくな者無之「駒とめて袖うちはらふ」「見わたせば花も紅葉も」抔が人にもてはやさるゝ位の者に有之候。定家を狩野派の畫師に比すれば探幽と善く相似たるかと存候。定家に傑作無く探幽にも傑作無し。併し定家も探幽も相當に練磨の力はありて如何なる場合にも可なりにやりこなし申候。兩人の名譽は相如く程の位置に居りて〈定〉家以後歌の門閥を生じ探幽以後畫の門閥を生じ兩家とも門閥を生じたる後は歌も畫も全く腐敗致候。いつの代如何なる技藝にても歌の格畫の格などゝいふやうな格がきまつたら最早進歩致す間敷候。

香川景樹は古今貫之崇拜にて見識の低きことは今更申す迄も無之候。俗な歌の多き事も無論に候。併し景樹には善き歌も有之候。自己が崇拜する貫之よりも善き歌多く候。それは景樹が貫之よりえらかつたのかどうかは分らぬ只景樹時代には貫之時代よりも進歩して居る點があるといふ事は相違無ければ從て景樹に貫之よりも善き歌が出來るといふも自然の事と存候。景樹の歌がひどく玉石混淆である處は俳人でいふと蓼太に比するが適當と被思候。蓼太は雅俗巧拙の兩極端を具へた男で其句に兩極端が現れ居候。且滿身の覇氣でもつて世人を籠絡し全國に夥しき門派の末流をもつて居た處なども善く似て居るかと存候。景樹を學ぶなら善き處を學ばねば甚だしき邪路に陷り可申今の景樹派などゝ申すは景樹の俗な處を學びて景樹よりも下手につらね申候。ちゞれ毛の人が束髪に結びしを善き事と思ひて束髪にいふ人はわざ〳〵毛をちゞらしたらんが如き趣有之候。こゝの處よく〳〵濶眼を開いて御判別可有候。古今上下東西の文學など能く比較して御覽可被成くだらぬ歌書許り見て居つては容易に自己の迷を醒まし難く見る所狹ければ自分の瀾車の動くのを知らで隣の瀾車が動くやうに覺ゆる者に御座候。不盡。

〔日本附録週報　明治31・2・14〕

三たび歌よみに與ふる書

前略。歌よみの如く馬鹿なのんきなものはまたと無之候。歌よみのいふ事を聞き候へば和歌程善き者は他に無き由いつでも誇り申候へども歌よみは歌より外の者は何も知らぬ故に歌が一番善きやうに自惚候次第に有之候。彼等は歌に尤も近き俳句すら少しも解せず十七字でさへあれば川柳も俳句も同じと思ふ程ののんきさ加減なれば、況して支那の詩を研究するでも無く西洋には詩といふものが有るやら無いやらそれも分らぬ文盲淺學、況して小説や院本も和歌と同じく文學といふ者に屬すと聞かば定めて目を剥いて驚き可申候。斯く申さば讒謗罵詈禮を知らぬしれ者と思ふ人もあるべけれど實際なれば致方無之候。若し生の言が誤れりと思さば所謂歌よみの中より只の一人にても俳句を解する人を御指名可被下候。生は歌よみに向ひて何の恨も持たぬに斯く罵詈がましき言を放たねばならぬやうに相成候心の程御察被下度候。

歌を一番善いと申すは固より理窟も無き事にて一番善い譯は毫も無之候。俳句には俳句の長所あり、支那の詩には支那の詩の長所あり、西洋の詩には西洋の詩の長所あり、戯曲院本には戯曲院本の長所あり、其長所は固より和歌の及ぶ所にあらず候。理窟は別とした處で一體歌よみは和歌を一番善い者と考へた上でどうする積りにや、歌が一番善い者ならばどうでもかうで

も上手でも下手でも三十一文字並べさへすりや天下第一の者であつて秀逸と稱せらるゝ俳句にも漢詩にも洋詩にも優りたる者と思ひ候者にや其量見が聞きたく候。最も下手な歌も最も善き俳句漢詩等に優り候程ならば誰も俳句漢詩等に骨折る馬鹿はあるまじく候。若し又俳句漢詩等にも和歌より善き者あり和歌にも俳句漢詩等より惡き者ありといふならば和歌ばかりが一番善きにてもあるまじく候。歌よみの淺見には今更のやうに呆れ申候。

俳句には調が無くて和歌には調がある、故に和歌は俳句に勝れりとある人は申し候。これは強ち一人の論では無く歌よみ仲間には箇樣な説を抱く者多き事と存候。歌よみどもはいたく調といふ事を誤解致居候。調にはなだらかなる調も有之、迫りたる調も有之候。平和な長閑な樣を歌ふにはなだらかなる長き調を用うべく悲哀とか慷慨とかにて情の迫りたる時又は天然にても人事にても景象の活動甚だしく變化の急なる時之を歌ふには迫りたる短き調を用うべきは論ずる迄も無く候。然るに歌よみは調は總てなだらかなる者とのみ心得候と相見え申候。斯る誤を來すも畢竟從來の和歌がなだらかなる調子のみを取り來りしに因る者にて、俳句も漢詩も見ず歌集ばかり讀みたる歌よみには爾か思はるゝも無理ならぬ事と存候。さて〳〵困つた者に御座候。なだらかなる調が和歌の長所ならば迫りたる調が俳句の長所なる事は分り申さゞるやらん。併し迫りたる調強き調などいふ調の味は所謂歌よみには到底分り申す間敷か。眞淵は雄々しく強き歌を好み候へどもさて其歌を見ると存外に雄々しく強き者は少く、實朝の歌の雄々しく強きが如きは眞淵には一首も見あたらず候。「飛ぶ鷲の翼もたわに」などいへるは眞淵集中

の佳什（かじふ）にて強き方の歌なれども意味ばかり強くて調子は弱く感ぜられ候。實朝をして此意匠を詠ましめば箇様な調子には詠むまじく候。「ものゝふの矢なみつくろふ」の歌の如き鷲を吹き飛ばすほどの荒々しき趣向ならねど調子の強き事は並ぶ者無く此歌を誦（しよう）すれば霰（あられ）の音を聞くが如き心地致候。眞淵既に然りとせば眞淵以下の歌よみは申す迄も無く候。斯る歌よみに蕪村派の俳句集か盛唐の詩集か讀ませたく存候へども騎（た）りきつたる歌よみどもは宗旨以外の書を讀むことは承知致すまじく勸めるだけが野暮（やぼ）にや候べき。

御承知の如く生は歌よみよりは局外者とか素人とかいはるゝ身に有之從つて詳しき歌の學問は致さず格が何だか文法が何だか少しも承知致さず候へども大體の趣味如何に於ては自ら信ずる所あり此點に就きて却（かへつ）て專門の歌よみが不注意を責むる者に御座候。箇様に惡口をつき申さば生を彌次馬連と同様に見る人もあるべけれど生の彌次馬連なるか否かは貴兄は御承知の事と存候。異論の人あらば何人にても來訪あるやう貴兄より御傳へ被下度三日三夜なりともつゞけさまに議論可致候。熱心の點に於ては決して普通の歌よみどもには負け不申候。情激し筆走り候まゝ失禮の語も多かるべく御海容可被下候。拜具。

〔日本　明治31・2・18〕

四たび歌よみに與ふる書

拝啓。空論ばかりにては傍人に解し難く實例に就きて評せよとの御言葉御尤と存候。實例と申しても際限も無き事にていづれを取りて評すべきやらんと惑ひ候へども成るべく名高き者より試み可申候。御思ひあたりの歌ども御知らせ被下度候。さて人丸の歌にかありけん

ものゝふの八十氏川（やそうぢがは）の網代木（あじろぎ）に
　いざよふ波のゆくへ知らずも

といふが屡　引きあひに出されるやうに存候。此歌萬葉時代に流行せる一氣呵成（かせい）の調にて少しも野卑なる處は無く字句もしまり居り候へども全體の上より見れば上三句は贅物（ぜいぶつ）に屬し候。「足引の山鳥の尾の」といふ歌も前置の詞多けれどあれは前置の詞長きために夜の長き様を感ぜられ候。これは又上三句全く役に立ち不申候。此歌を名所の歌の手本に引くは大たわけに御座候。總じて名所の歌といふは其の地の特色なくては叶はず此歌の如く意味無き名所の歌は名所の歌になり不申候。併し此歌を後世の俗氣紛々たる歌に比ぶれば勝ること萬々に候。且つ此種の歌は眞似すべきにはあらねど多き中に一首二首あるは面白く候。

月見れば千々に物こそ悲しけれ

我身一つの秋にはあらねど

といふ歌は最も人の賞する歌なり。上三句はすらりとして難無けれども下二句は理窟なり蛇足なりと存候。歌は感情を述ぶる者なるに理窟を述ぶるは歌を知らぬ故にや候らん。此歌下二句が理窟なる事は消極的に言ひたるにても知れ可申、若し我身一つの秋と思ふと詠むならば感情的なれども秋ではないがと當り前の事をいはゞ理窟に陥り申候。箇様な歌を善しと思ふは其人が理窟を得離れぬがためなり、俗人は申すに及ばず今の所謂歌よみどもは多く理窟を並べて樂み居候。嚴格に言はゞ此等は歌でも無く歌よみでも無く候。

芳野山霞の奥は知らねども

見ゆる限りは櫻なりけり

八田知紀（はつたとものり）の名歌とか申候。知紀の家集はいまだ讀まねどこれが名歌ならば大概底も見え透き候。此も前のと同じく「霞の奥は知らねども」と消極的に言ひたるが理窟に陥り申候。既に見ゆる限りはといふ上は見えぬ處は分らぬがといふ意味は其の裏に籠り居り候ものをわざ〳〵知らねどもとことわりたる、これが下手と申すものに候。且つ此歌の姿、見ゆる限りは櫻なりけりなどいへるも極めて拙（つたな）く野卑なり、前の千里の歌は理窟こそ惡けれ姿は遙に立ちまさり居候。序に申さんに消極的に言へば理窟になると申しゝ事いつでもしかなりといふに非ず、客觀的の景色を連想していふ場合は消極にても理窟にならず、例へば「駒とめて袖うち拂ふ影もなし」といへるが如きは客觀の景色を連想したる迄にて斯くいはねば感情を現す能はざる者なれば無

論理窟にては無之候。又全體が理窟めきたる歌あり（釋教の歌の類）これらは却て言ひ様にて多少の趣味を添ふべけれど、此芳野山の歌の如く全體が客觀的即ち景色なるに其中に主觀的理窟の句がまじりては殺風景いはん方無く候。又同人の歌にかありけん

うつせみの我世の限り見るべきは
　嵐の山の櫻なりけり

といふが有之候由さて〳〵驚き入つたる理窟的の歌にては候よ。嵐山の櫻のうつくしいと申すは無論客觀的の事なるにそれを此歌は理窟的に現したり、此歌の句法は全體理窟的の趣向の時に用うべき者にして、此趣向の如く客觀的にいはざるべからざる處に用ゐたるは大俗のしわざと相見え候。「べきは」と係けて「なりけり」と結びたるが最理窟的殺風景の處に有之候。一生嵐山の櫻を見やうといふも變なくだらぬ趣向なり、此歌全く取所無之候。猶手當り次第可申上候也。

〔日本　明治31・2・21〕

五たび歌よみに與ふる書

心あてに見し白雲は麓にて
　　思はぬ空に晴るゝ不盡の嶺

といふは春海（はるみ）のなりしやに覺え候。これは不盡（ふじ）の裾より見上げし時の即興なるべく生も實際に斯く感じたる事あれば面白き歌と一時は思ひしが今ま見れば拙き歌に有之候。第一、麓といふ語如何や、心あてに見し處は少くも半腹位の高さなるべきをそれを麓といふべきや疑はしく候。第二、それは善しとするも「麓にて」の一句理窟ぽくなつて面白からず、只心あてに見し雲よりは上にありしとばかり言はねばならぬ處に候。第三、不盡の高く壯觀（さかん）なる樣を詠まんとならば今少し力強き歌ならざるべからず、此歌の姿弱くして到底不盡に副（そ）ひ申さず候。几董（きとう）の俳句に「晴るゝ日や雲を貫く雪の不盡」といふがあり、極めて尋常に敍し去りたれども不盡の趣は却て善く現れ申候。

もしほ燒く難波の浦の八重霞
　　一重はあまのしわざなりけり

契沖の歌にて俗人の傳稱する者に有之候へども此歌の品下りたる事は稍心ある人は承知致居

事と存候。此歌の傳稱せらるゝはいふ迄も無く八重一重の掛合にあるべけれど余の攻撃點も亦此處に外ならず、總じて同一の歌にて極めてほめる處と他の人の極めて誹る處とは同じ點に在る者に候。八重霞といふもの固より八段に分れて霞みたるにあらねば一重といふこと一向に利き不申、又初に「藻汐焚く」と置きし故後に煙とも言ひかねて「あまのしわざ」と主觀的に置きたる處いよ〳〵俗に墮ち申候。こんな風に詠まずとも、霞の上に藻汐焚く煙のなびく由尋常に詠まばつまらぬ迄も斯る厭味は出來申間敷候。

心あてに折らはや折らむ初霜の
　置きまどはせる白菊の花

此躬恒の歌百人一首にあれば誰も口ずさみ候へども一文半文のねうちも無之駄歌に御座候。此歌は嘘の趣向なり、初霜が置いた位で白菊が見えなくなる氣遣無之候。趣向嘘なれば趣も絲瓜も有之不申、蓋しそれはつまらぬ嘘なるからにつまらぬにて、上手な嘘は面白く候。例へば「鵲のわたせる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」面白く候。躬恒のは瑣細な事を矢鱈に仰山に述べたのみなれば無趣味なれども家持のは全く無い事を空想で現はして見せたる故面白く被感候。嘘を詠むなら全く無い事とてつもなき嘘を詠むべし、然らざれば有の儘に正直に詠むが宜しく候。雀が舌剪られたとか狸が婆に化けたなどの嘘は面白く候。今朝は霜がふつて白菊が見えんなどと眞面目らしく人を欺く仰山的の嘘は極めて殺風景に御座候。「露の落つる音」とか「梅の月が匂ふ」とかいふ事をいふて樂む歌よみが多く候へども是等も面白からぬ

嘘に候。總て嘘といふものは一二度は善けれどたび〳〵詠まれては面白き嘘も面白からず相成申候。況して面白からぬ嘘はいふ迄も無く候。「露の音」「月の匂」「風の色」などは最早十分なれば今後の歌には再び現れぬやう致したく候。「花の匂」などいふも大方は嘘なり、櫻などには格別の匂は無之、「梅の匂」でも古今以後の歌よみの詠むやうに匂ひ不申候。

春の夜の闇はあやなし梅の花
色こそ見えね香やは隠るゝ

「梅闇に匂ふ」とこれだけで濟む事を三十一文字に引きのばしたる御苦勞加減は恐れ入つた者なれどこれも此頃には珍らしき者として許すべく候はんに、あはれ歌人よ「闇に梅匂ふ」の趣向は最早打どめに被成ては如何や。闇の梅に限らず普通の梅の香も古今集だけにて十餘りもありそれより今日迄の代々の歌よみがよみし梅の香はおびたゞしく數へられもせぬ程なるにこれも善い加減に打ちとめて香水香料に御用ひ被成候は格別其外歌には一切之を入れぬ事とし鼻つまりの歌人と嘲らるゝ程に御遠ざけ被成ては如何や。小さき事を大きくいふ嘘が和歌腐敗の一大原因と相見え申候。

〔日本　明治31・2・23〕

六たび歌よみに與ふる書

御書面を見るに愚意を誤解被致候。殊に變なるは御書面中四五行の間に撞著（どうちやく）有之候。初に「客觀的景色に重きを措きて詠むべし」とあり次に「客觀的にのみ詠むべきものとも思はれず」云々とあるは如何。生は客觀的にのみ歌を詠めと申したる事は無之候。客觀に重きを置けと申したる事も無けれど此方は愚意に近きやう覺え候。「皇國の歌は感情を本として」云々とは何の事に候や。詩歌に限らず總ての文學が感情を本とする事は古今東西相違あるべくも無之、若し感情を本とせずして理窟を本としたる者あらばそれは歌にても文學にてもあるまじく候。故（ことさ）らに皇國の歌はなど言はるゝは例の歌より外に何物も知らぬ歌よみの言かと被怪候。「何れの世に何れの人が理窟を讀みては歌にあらずと定め候哉」とは驚きたる御問に有之候。理窟が文學に非ずとは古今の人東西の人盡く（ことごと）一致したる定義にて、若し理窟をも文學なりと申す人あらばそれは大方日本の歌よみならんと存候。

客觀主觀感情理窟の語に就きて或は愚意を誤解被致居にや。全く客觀的に詠みし歌なりとも感情を本としたるは言を竢（ま）たず。例へば橘の袂に柳が一本風に吹かれて居るといふことを其儘歌にせんには其歌は客觀的なれども、元と此歌を作るといふは此客觀的景色を美なりと思ひし

結果なれば感情に本づく事は勿論にて只うつくしいとか奇麗とかうれしいとか樂しいとかいふ語を著くると著けぬとの相違に候。又主觀的と申す内にも感情と理窟との區別有之、生が排斥するは主觀中の理窟の部分にして、感情の部分には無之候。感情的主觀の歌は客觀の歌と比して此主客兩觀の相違の點より優劣をいふべきにあらず、されば生は客觀に重きを置く者にても無之候。但和歌俳句の如き短き者には主觀的佳句よりも客觀的佳句多しと信じ居候へば客觀に重きを置くといふも此處の事を意味すると見れば差支無之候。又主觀客觀の區別、感情理窟の限界は實際判然したる者に非ずとの御論は御尤に候。それ故に善惡可否巧拙と評するも固より劃然たる區別あるに非ず巧の極端と拙の極端とは毫も紛るゝ處あらねど巧と拙との中間に在る者は巧とも拙とも申し兼候。感情と理窟の中間に在る者は此場合に當り申候。

「同じ用語同じ花月にても其れに對する吾人の觀念と古人のと相違する事珍しからざる事にて」云々それは勿論の事なれどそんな事は生の論ずることゝ毫も關係無之候。今は古人の心を忖度するの必要無之、只此處にては古今東西に通ずる文學の標準（自ら斯く信じ居る標準なり）を以て文學を論評する者に有之候。昔は風帆船が早かつた時代もありしかど蒸氣船を知りて居る眼より見れば風帆船は遲しと申すが至當の理に有之貫之は貫之時代の歌の上手とするも前後の歌よみを比較して貫之より上手の者外に澤山有之と思はゞ貫之を下手と評すること亦至當に候。歷史的に貫之を褒めるならば生も強ち反對にては無之候へども只今の論は歷史的に其人物を評するにあらず、文學的に其歌を評するが目的に有之候。

「日本文學の城壁とも謂ふべき國歌」云々とは何事ぞ。代々の勅撰集の如き者が日本文學の城壁ならば實に頼み少き城壁にて此の如き薄ッぺらな城壁は大砲一發にて滅茶滅茶に碎け可申候。生は國歌を破壞し盡すの考にては無之日本文學の城壁を今少し堅固に致し度外國の髯づらどもが大砲を發たうが地雷火を仕掛けうがびくとも致さぬ程の城壁に致し度心願有之、しかも生を助けて此心願を成就せしめんとする大檀那は天下一人も無く數年來鬱積沈滯せる者頃日漸く出口を得たる事とて前後錯雜序次倫無く大言疾呼我ながら狂せるかと存候程の次第に御座候。傍人より見なば定めて狂人の言とさげすまるゝ事と存候。猶此度新聞の餘白を借り傳へたるを機とし思ふ樣愚考も述べたく、それ丈にては愚意分りかね候に付愚作をも連ねて御評願ひ度存居候へども或は先輩諸氏の怒に觸れて差止めらるゝやうな事は無きかとそれのみ心配罷在候。心配、恐懼、喜悦、感慨、希望等に惱まされて從來の病體益　神經の過敏を致し日來睡眠に不足を生じ候次第愚とも狂とも御笑ひ可被下候。

　從來の和歌を以て日本文學の基礎とし城壁と爲さんとするは弓矢劍槍を以て戰はんとすると同じ事にて明治時代に行はるべき事にては無之候。今日軍艦を購ひ大砲を購ひ巨額の金を外國に出すも畢竟日本國を固むるに外ならず、されば僅少の金額にて購ひ得べき外國の文學思想抔は續々輸入して日本文學の城壁を固めたく存候。生は和歌に就きても舊思想を破壞して新思想を注文するの考にて隨つて用語は雅語俗語漢語洋語必要次第用うる積りに候。委細後便。

　追て伊勢の神風、宇佐の神勅云々の語あれども文學には合理非合理を論ずべき者にては無

之、從つて非合理は文學に非ずと申したる事無之候。非合理の事にて文學的には面白き事不少候。生の寫實と申すは合理非合理事實非事實の謂にては無之候。油畫師は必ず寫生に依り候へどもそれで神や妖怪やあられもなき事を面白く書き申候。併し神や妖怪を畫くにも勿論寫生に依るものにて、只有の儘を寫生すると一部々々の寫生を集めるとの相違に有之、生の寫實も同樣の事に候。是等は大誤解に候。

〔日本　明治31・2・24〕

七たび歌よみに與ふる書

前便に言ひ殘し候事今少し申上候。宗匠的俳句と言へば直ちに俗氣を聯想するが如く和歌といへば直ちに陳腐を聯想致候が年來の習慣にてはては和歌といふ字は陳腐といふ意味の字の如く思はれ申候。斯く感ずる者和歌社會には無之と存候へど歌人ならぬ人は大方箇樣の感を抱き候やに承り候。をり〳〵は和歌を誹(そし)る人に向ひてさて和歌は如何樣に改良すべきかと尋ね候へば其人が首をふつていやとよ和歌は腐敗し盡したるにいかでか改良の手だてあるべき置きね〳〵など言ひはなし候樣は恰(あたか)も名醫が匙を投げたる死際の病人に對するが如き感を持ち居候者と相見え申候。實にも歌は色青ざめ呼吸絶えんとする病人の如くにも有之候よ。さりながら愚考はいたく異なり、和歌の精神こそ衰へたれ形骸は猶保つべし、今にして精神を入れ替へなば再び健全なる和歌となりて文壇に馳驅するを得べき事を保證致候。こはいはでもの事なるを或る人がはやこと切れたる病人と一般に見做(な)し候は如何にも和歌の腐敗の甚しきに呆れて一見して抛棄したる者にや候べき。和歌の腐敗の甚しさもこれにて大方知れ可申候。

此腐敗と申すは趣向の變化せざるが原因にて、又趣向の變化せざるは用語の少きが原因と被存候。故に趣向の變化を望まば是非とも用語の區域を廣くせざるべからず、用語多くなれば從

つて趣向も變化可致候。ある人が生を目して和歌の區域を狹くする者と申し候は誤解にて少しにても廣くするが生の目的に御座候。とはいへ如何に區域を廣くするとも非文學的思想は容れ不申、非文學的思想とは理窟の事に有之候。

外國の語も用ゐよ外國に行はるゝ文學思想も取れよと申す事に就きて日本文學を破壞する者と思惟する人も有之げに候へどもそれは既に根本に於て誤り居候。たとひ漢語の詩を作るとも洋語の詩を作るとも將たサンスクリツトの詩を作るとも日本人が作りたる上は日本の文學に相違無之候。唐制に摸して位階も定め服色も定め年號も定め置き唐ぶりたる冠衣を著け候とも日本人が組織したる政府は日本政府と可申候。英國の軍艦を買ひ獨國の大砲を買ひそれで戰に勝ちたりとも運用したる人にして日本人ならば日本の勝と可申候。併し外國の物を用うるは如何にも殘念なれば日本固有の物を用ゐんとの考ならば其志には贊成致候へども迚も日本の物ばかりでは物の用に立つまじく候。文學にても馬、梅、蝶、菊、文等の語をはじめ一切の漢語を除き候はゞ如何なる者が出來候べき。源氏物語枕草子以下漢語を用ゐたる物を排斥致し候はゞ日本文學は幾何か殘り候べき。それでも痩我慢に歌ばかりは日本固有の語にて作らんと決心したる人あらばそは御勝手次第ながら其を以て他人を律するは無用の事に候。日本人が皆日本固有の語を用うるに至らば日本は成り立つまじく日本文學者が皆日本固有の語を用ゐたらば日本文學は破滅可致候。

或は姑息にも馬、梅、蝶、菊、文等の語はいと古き代より用ゐ來りたれば日本語と見做すべ

しなどいふ人も可有之候へどいと古き代の人は其頃新しく輸入したる語を用ゐたる者にて此姑息論者が當時に生れ居らばそれをも排斥致し候ひけん。いと笑ふ可き撞着に御座候。假に姑息論者に一歩を借して古き世に使ひし語をのみ用うるとして、若し王朝時代に用ゐし漢語だけにても十分に之を用ゐなば猶和歌の變化すべき餘地は多少可有之候。されど歌の詞（ことば）と物語の詞とは自ら別なり物語などにある詞にて歌には用ゐられぬが多きなど例の歌よみは可申候。何たる笑ふ可き事には候ぞや。如何なる詞にても美の意を運ぶに足るべき者は皆歌の詞と可申之を外にして歌の詞といふ者は無之候。漢語にても洋語にても文學的に用ゐられなば皆歌の詞と可申候。

〔日本　明治31・2・28〕

八たび歌よみに與ふる書

惡(あし)き歌の例を前に擧げたれば善き歌の例をこゝに擧げ可申候。惡き歌といひ善き歌といふも四つや五つばかりを擧げたりとて愚意を盡すべくも候はねど無きには勝りてんと聊(いささ)か列(つら)ね申候。先づ金槐和歌集などより始め申さんか。

武士の矢並つくろふ小手の上に霰たはしる那須の篠原

といふ歌は萬口一齊に歎賞するやうに聞き候へば今更取りいでゝいはでもの事ながら猶御氣のつかれざる事もやと存候まゝ一應申上候。此歌の趣味は誰しも面白しと思ふべく又此の如き趣向が和歌には極めて珍しき事も知らぬ者はあるまじく又此歌が強き歌なる事も分り居り候へども、此種の句法が殆ど此歌に限る程の特色を爲し居るとは知らぬ人ぞ多く候べき。普通に歌はなり、けり、らん、かな、けれ抔の如き助辭を以て斡旋せらるゝにて名詞の少きが常なるに、此歌に限りては名詞極めて多く「てにをは」は「の」の字三、「に」の字一、二個の動詞も現在になり（動詞の最短き形）居候。此の如く必要なる材料を以て充實したる歌は實に少く候。新古今の中には材料の充實したる句法の緊密なる稍此歌に似たる者あれど猶此歌の如くは語々活動せざるを覺え候。萬葉の歌は材料極めて少く簡單を以て勝る者、實朝一方には此萬葉を擬

し一方には此の如く破天荒の歌を爲す、其力量實に測るべからざる者有之候。又晴を祈る歌に

　　時によりすくれは民のなけきなり八大龍王雨やめたまへ

といふがあり恐らくは世人の好まざる所と存候へどもこは生の好きで〳〵たまらぬ歌に御座候。此の如く勢強き恐ろしき歌はまたと有之間敷、八大龍王を叱咤する處龍王も懾伏（せふふく）致すべき勢相現れ申候。八大龍王と八字の漢語を用ゐたる處雨やめたまへと四三の調を用ゐたる處皆此歌の勢を強めたる所にて候。初三句は極めて拙き句なれども其一直線に言ひ下して拙き處却て其眞率僞りなきを示して祈晴（きせい）の歌などには最も適當致居候。實朝は固より善き歌作らんとて之を作りしにもあらざるべく只眞心より詠み出でたらんがなか〳〵に善き歌とは相成り候ひしやらん。こゝらは手のさきの器用を弄し言葉のあやつりにのみ拘（こだは）る歌よみどもの思ひ至らぬ場所に候。三句切の事は猶他日詳（つまびらか）に可申候へども三句切の歌にぶつゝかり候故一言致置候。三句の歌詠むべからずなどいふは守株（しゅしゅ）の〈論〉にて論ずるに足らず候へども三句切の歌は尻輕くなるの弊有之候。此弊を救ふために下二句の内を字餘りにする事屡有之此歌も其一にて（前に擧げたる大江千里の月見ればの歌も此例。猶其外にも數へ盡すべからず）候。此歌の如く下を字餘りにする時は三句切にしたる方却て勢強く相成申候。取りも直さず此歌は三句切の必要を示したる者に有之候。又

　　物いはぬよものけたものすらたにもあはれなるかなや親の子を思ふ

の如き何も別にめづらしき趣向もなく候へども一氣呵成の處却て眞心を現して餘りあり候。序

に字餘りの事一寸申候。此歌は第五句字餘り故に面白く候。或る人は字餘りとは餘儀なくする者と心得候へどもさにあらず、字餘りには凡(およそ)三種あり、第一、字餘りにしたるがために面白き者、第二、字餘りにしたるがため惡き者、第三、字餘りにするともせずとも可なる者と相分れ申候。其中にも此歌は字餘りにしたるがため面白き者に有之候。若し「思ふ」といふ〈を〉つめて「もふ」など吟じ候はんには興味索然と致し候。こゝは必ず八字に讀むべきにて候。又此歌の最後の句にのみ力を入れて「親の子を思ふ」とつめしは情の切なるを現す者にて、若し「親の」の語を第四句に入れ最後の句を「子を思ふかな」「子や思ふらん」など致し候はゞ例のやさしき調となりて切なる情は現れ不申、從つて平凡なる歌と相成可申候。歌よみは古來助辭を濫用致し候樣宋人の虛字を用ゐて弱き詩を作るに一般に御座候。實朝の如きは實に千古の一人と存候。

前日來生は客觀詩をのみ取る者と誤解被致候ひしも其然らざるは右の例にて相分り可申那須の歌は純客觀、後の二首は純主觀にて共に愛誦する所に有之候。併し此三首ばかりにては強き方に偏し居候へば或は又強き歌をのみ好むかと被考(かんがへられ)候はん。猶多少の例歌を擧ぐるを御待可被下候。

〔日本　明治31・3・1〕

九たび歌よみに與ふる書

一々に論ぜんもうるさければ只二三首を擧げ置きて金槐集以外に遷り候べく候。

山は裂け海はあせなん世なりとも君にふた心われあらめやも

箱根路をわか越え來れは伊豆の海やおきの小島に波のよる見ゆ

世の中はつねにもかもなきさ漕く海人の小舟の綱手かなしも

大海のいそもとゝろによする波われてくたけてさけて散るかも

箱根路の歌極めて面白けれども斯る想は今古に通じたる想なれば實朝が之を作りたりとて驚くにも足らず只世の中はの歌の如く古意古調なる者が萬葉以後に於てしかも華麗を競ふたる新古今時代に於て作られたる技量には驚かざるを得ざる譯にて實朝の造詣の深き今更申すも愚かに御座候。大海の歌實朝のはじめたる句法にや候はん。

新古今に移りて二三首を擧げんに

なこの海の霞のまよりなかむれは入日を洗ふ沖つ白波　（實定）

此歌の如く客觀的に景色を善く寫したる者は新古今以前にはあらざるべくこれらも此集の特色として見るべき者に候。惜むらくは「霞のまより」といふ句が疵にて候。一面にたなびきた

る霞に間といふも可笑しく、縦し間ありともそれは此趣向に必要ならず候。入日も海も霞みながらに見ゆるこそ趣は候なれ。

ほの〳〵と有明の月の月影は紅葉吹きおろす山おろしの風　（信明）

これも客観的の歌にてけしきも淋しく艶なるに語を疊みかけて調子取りたる處いとめづらかに覺え候。

さひしさに堪へたる人のまたもあれな庵を並へん冬の山里　（西行）

西行の心はこの歌に現れ居候。「心なき身にも哀れは知られけり」などいふ露骨的の歌が世にもてはやされて此歌などは却て知る人少きも口惜く候。庵を並べんといふが如き斬新にして趣味ある趣向は西行ならでは得言はざるべく特に「冬の」と置きたるも亦尋常歌よみの手段にあらずと存候。後年芭蕉が新に俳諧を興せしも寂は「庵を並べん」などより悟入し季の結び方は「冬の山里」などより悟入したるに非ざるかと被思候。

閨の上にかたえさしおほひ外面なる葉廣柏に霰ふるなり　（能因）

これも客観的の歌に候。上三句複雑なる趣を現さんとて稍　混雑に陥りたれど葉廣柏に霰のはぢく趣は極めて面白く候。

岡の邊の里のあるしを尋ぬれは人は答へす山おろしの風　（慈圓）

趣味ありて句法もしつかりと致し居候。此種の歌の第四句を「答へで」などいふが如く下に連續する句法となさば何の面白味も無之候。

さゝ波や比良山風の海吹けは釣する蜑(あま)の袖かへる見ゆ　（讀人しらず）

實景を其儘に寫し些の巧を弄ばぬ所却て興多く候。

神風や玉串の葉をとりかさし内外(うちと)の宮に君をこそ祈れ　（俊惠）

神祇の歌といへば千代の八千代のと定文句を並ぶるが常なるに此歌はすつぱりと言ひはなしたるなか〳〵に神の御心にかなふべく覺え候。句のしまりたる所半ば客觀的に敍したる所など注意すべく神風やの五字も譯なきやうなれど極めて善く響き居候。

阿耨多羅三藐三菩提(あのくたらさんみやくさんぼだい)の佛たちわか立つ杣(そま)に冥加あらせたまへ　（傳教）

いとめでたき歌にて候。長句の用ゐ方など古今未曾有にてこれを詠みたる人もさすがなれど此歌を勅選集に加へたる勇氣も稱するに足るべくと存候。第二句十字の長句ながら成語なれば左迄口にたまらず、第五句九字にしたるはことさらとにもあらざるべけれど此所はことさらにも九字位にする必要有之、若し七字句などを以て止めたらんには上の十字句に對して釣合取れ不申候。初めの方に字餘りの句あるがために後にも字餘りの句を置かねばならぬ場合は屢　有之候。若し字餘りの句は一句にても少きが善しなどいふ人は字餘りの趣味を解せざるものにや候べき。

〔日本　明治31・3・3〕

十たび歌よみに與ふる書

先輩崇拝といふことは何れの社會にも有之候。それも年長者に對し元勳に對し相當の敬禮を盡すの意ならば至當の事なれどもそれと同時に何かは知らず其人の力量技術を崇拝するに至りては愚の至りに御座候。田舎の者などは御歌所といへばえらい歌人の集り、御歌所長といへば天下第一の歌よみの様に考へ、從つて其人の歌と聞けば讀まぬ内からはや善き者と定め居るなどありうちの事にて生も昔は其仲間の一人に候ひき。今より追想すれば赤面する程の事に候。御歌所とてえらい人が集まる筈も無く御歌所長とて必ずしも第一流の人が坐るにもあらざるべく候。今日は歌よみなる者皆無の時なれどそれでも御歌所連より上手なる歌よみならば民間に可有之候。田舎の者が元勳を崇拝し大臣をえらい者に思ひ政治上の力量も識見も元勳大臣が一番に位する者と迷信致候結果、新聞記者などが大臣を誹(そし)るを見て「いくら新聞屋が法螺(ほら)吹いたとて、大臣は親任官、新聞屋は素寒貧、月と泥龜(すつぽん)程の違ひだ」などゝ罵(ののし)り申候。少し眼のある者は元勳がどれ位無能力かといふ事大臣は廻り持にて新聞記者より大臣に上りし實例ある事位は承知致し説き聞かせ候へども田舎の先生は一向無頓着にて不相變元勳崇拝なるも腹立たしき譯に候。あれ程民間にてやかましくいふ政治の上猶然りとすれば今迄隱居したる歌社會に老人

崇拝の田舎者多きも怪むに足らねども此老人崇拝の弊を改めねば歌は進歩不可致候。歌は平等無差別なり、歌の上に老少も貴賤も無之候。歌よまんとする少年あらば老人抔にかまはず勝手に歌を詠むが善かるべくと御傳言可被下候。明治の漢詩壇が振ひたるは老人そちのけにして青年の詩人が出たる故に候。俳句の觀を改めたるも月並連に構はず思ふ通りを述べたる結果に外ならず候。

縁語を多く用うるは和歌の弊なり、縁語も場合によりては善けれど普通には縁語かけ合せなどあればそれがために歌の趣を損ずる者に候。縦し言ひほせたりとて此種の美は美の中の下等なる者と存候。無暗に縁語を入れたがる歌よみは無暗に地口駄洒落を並べたがる半可通と同じく御當人は大得意なれども側より見れば品の惡き事夥しく候。縁語に巧を弄せんよりは眞率に言ひながしたるが餘程上品に相見え申候。

歌といふといつでも言葉の論が出るには困り候。歌では「ぼたん」とは言はず「ふかみぐさ」と詠むが正當なりとか、此詞は斯うは言はず必ず斯ういふしきたりの者ぞなど言はるゝ人有之候へどもそれは根本に於て已に愚考と異り居候。愚考は古人のいふた通りに言はんとするにても無く、しきたりに倣はんとするにても無く只自己が美と感じたる趣味を成るべく善く分るやうに現すが本來の主意に御座候。故に俗語を用ゐたる方其美感を現すに適せりと思はゞ雅語を捨てゝ俗語を用ゐ可申、又古來のしきたりの通りに詠むことも有之候へどそれはしきたりなるが故に其を守りたるにては無之其方が美感を現すに適せるがために之を用ゐたる迄に候。古人

のしきたりなど申せども其古人は自分が新に用ゐたるぞ多く候べき。

牡丹と深見草(ふかみくさ)との區別を申さんに生等には深見草といふよりも牡丹といふ方が牡丹の幻影早く著(いちじる)く現れ申候。且つ「ぼたん」といふ音の方が強くして、實際の牡丹の花の大きく凛としたる所に善く副(そ)ひ申候。故に客觀的に牡丹の美を現さんとすれば牡丹と詠むが善き場合多かるべく候。

新奇なる事を詠めといふと瀛車、鐵道などいふ所謂文明の器械を持ち出す人あれど大に量見が間違ひ居り候。文明の器械は多く不風流なる者にて歌に入り難く候へども若しこれを詠まんとならば他に趣味ある者を配合するの外無之候。それを何の配合物も無く「レールの上に風が吹く」などゝやられては殺風景の極に候。せめてはレールの傍に菫が咲いて居るとか、又は瀛車の過ぎた後で罌粟(けし)が散るとか薄がそよぐとか言ふやうに他物を配合すればいくらか見よくなるべく候。又殺風景なる者は遠望する方宜しく候。菜の花の向ふに瀛車が見ゆるとか、夏草の野末を瀛車が走るとかするが如きも殺風景を消す一手段かと存候。

いろ〳〵言ひたき儘取り集めて申上候。猶ほ他日詳かに申上ぐる機會も可有之候。以上。月日。

〔日本　明治31・3・4〕

青空文庫情報

底本：「子規全集　第七巻　歌論　選歌」講談社
　　1975（昭和50）年7月18日第1刷発行
※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本にそって修正し、組み入れました。
「歌よみに与ふる書（新字旧仮名）」（入力：網迫、土屋隆、校正：川向直樹）
※底本では編者によって補われた文字が〈〉で示されています。本ファイルの作成に当たっては、底本が用いた〈〉をそのまま使用しました。
入力：川向直樹
校正：土屋隆
2010年1月27日作成
2010年11月16日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

歌よみに與ふる書

正岡子規

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/